

# 外来語音の表記のゆれに関する 定量的研究

松 崎 寛

キーワード 外来語音 日本語音 定着度 辞典類の外来語表記 音韻の認定

**要 旨** 外来語音韻の定着度は表記の問題と大きく関係する。本稿では17種の辞典類の外来語表記を調査し、ゆれをグラフ化した。その結果、ある拍が外来語音寄りか日本語音寄りかは語によりかなり異なることが数量的に再確認された。音韻認定の問題は語例により結論が大きく左右する。少数の語例から一方的な論を展開するのは危険である。

## 1. 研究の目的および調査の概要

近年の欧米を中心とする外国語借用により、現代日本語には新たな拍が生じつつある。このような外来語の音韻に関しては「日本語の音声は英語の発音に同化されて、音韻体系が崩壊していく」ので認定には慎重であるべきだ(小泉[1]p7)という意見もあるが、それは伝統的な五十音図を音韻体系と同一視した考えである。現代日本語音韻体系を「あきま」<sup>(1)</sup>の概念から整理すれば、外来語の音韻はむしろ逆に、音韻変化で不均衡を生じた体系を均整化する役割を果たしていると解釈することが充分可能である(松崎[2])。以下本稿では、このような、外来語独特に見られる拍を外来語音と称し、和語・漢語・外来語に用いる、拗音を含む拡大五十音図に見られるその他の拍を日本語音と称する。

これら外来語音の内、何を日本語の拍を構成するものの一つと見做すかには様々な考えがある。先学の説の一部を整理したのが表1で、これらに関してはその拍を含む語の語例数や慣用度などを考慮したとする説明が多いが、実際には執筆者の主観で恣意的に選定を行ったと思われる記述も少なくない<sup>(2)</sup>。

音韻定着の問題は表記の問題と大きく関係し、表記され得ぬ外来語音が安定する可能性は低い<sup>(3)</sup>。即ち音韻認定の問題は、その外来語音表記で安定した語がどの程度あるかということが基準の一つとなりうる。しかし外来語音表記のゆれに関し、定性的データを羅列した先行研究は多いが、ゆれのある語表記の

表1 外来語音の解釈 (4)

	シ	ェ	ェ	ィ	ェ	ヒ	ニ	ツ	ツ	ツ	ィ	ズ	ツ	ィ	テ	ィ	ド	テ	デュ	フ	フ	ィ	フ	ィ	フ	フ	ウ	ィ	ウ	ェ	ウ	ォ
プロック [3]	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
国語学 [4]	○	○	○	×	×	×	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○		
金田一 [5]	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○		
秋永 [6]	○	○	○	×	○	×	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×		
馬淵 [7]	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
西田 [8]	○	○	○	×	×	×	○	×	○	×	×	×	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○		
城生 [9]	○	○	○	○	×	×	○	○	○	×	×	×	○	○	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○		
古田 [10]	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
吉田 [11]	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○		
沢木 [12]	×	×	×	×	×	×	○	×	○	×	×	×	○	○	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
清水 [13]	○	○	○	×	×	×	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○		
上村 [14]	○	○	○	×	×	×	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○		
小泉 [1]	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×			
国研 [15]	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
沼本 [16]	○	○	○	×	×	×	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○		

何が一般的かは、定量的に論じねば説得力を持たない。本稿ではその一つの手がかりとして、辞典類の外来語音表記を調査し、ゆれをグラフ化した。

ところで外来語表記法の基準であるが、1991年内閣告示「外来語の表記」以前には確固たる規範が存在せず、国語審議会(1954)「外来語表記の原則」(以下「原則」)や教科書研究センター(1979)「地名表記の手引」(以下「地名」)等が主なものであった。「原則」は40年前の規則で、「原音意識が残る例外」の「ティー」「ビルディング」「プロデューサー」など数語を除くと、ファフィフェフォティディシェジェテュデュフュをハヒヘホチジセゼチュジュヒユと書かせるなど、外来語音を殆ど認めない。社会科地名表記の規範となる「地名」は、「原則」に比べシェジェファフィフェフォフェウウエウォ等を認めるが、ティディテュデュをチジチュジュと書かせる細則4などはやはり現状にそぐわない。そこで、NHKでは放送用語委員会の決定事項により、新聞社では新聞協会新聞用語懇談会の討議により各々独自に外来語表記の原則を設け、適宜改正を行うことで問題に対処している。

辞典類は規範的立場から表記を行う性質上、「原則」「地名」の影響を強く受け、保守的表記を行うと予想されるが、一方では編者の方針で統一的表記を行うものもあり(5)、それが外来語音寄りの場合、急進的・原音的表記だと解釈される。その意味では、辞典が実際の言語生活を正確に反映しているとは言い難く、表記のゆれを測定するには、宮島、高木[17]のように雑誌類からデータを採取の方が理想的ではある。しかし表記全般から見た場合、外来語が占める割合は非常に少なく、延べ語数の割合は標本全体の5~10%にすぎない。これをさらに外来語音の問題に絞り、ゆれの問題を定量的に論じるためには、非常に膨大

の資料が容易に得られる点を考慮し、資料とすることにした。辞典が規範的な立場から表記を行っているという危険性には充分注意せねばならないが、表記生活の静的な一面を表す点は正当に評価されて然るべきであろう。

語の採集は次の17種の辞典類により行った。

- |                                   |                         |
|-----------------------------------|-------------------------|
| 『情報知識 imidas』(1990)               | 『現代用語の基礎知識』(1990)       |
| 『基本外来語辞典』(1990)                   | 『日本語大辞典』(1989)          |
| 『新明解国語辞典』第四版(1989)                | 『大辞林』(1988)             |
| 『図解外来語辞典』第三版(1988)                | 『学研国語大辞典』(1988)         |
| 『岩波国語辞典』第四版(1986)                 | 『コンサイス外来語辞典』第四版(1987)   |
| 『言泉』(1986)                        | 『旺文社国語辞典』改訂新版(1986)     |
| 『小学館現代国語例解辞典』(1985)               | 『広辞苑』第三版(1983)          |
| 『三省堂国語辞典』第三版(1982)                | 『NHK放送のことばハンドブック』(1987) |
| 『朝日新聞基準による五十音順ワープロ対応用字用語辞典』(1990) |                         |

(以下、「イミ」「現代」「基本」「日本」「新明」「大辞」「図解」「学研」「コン」「岩波」「言泉」「旺文」「例解」「広辞」「三省」「NHK」「朝日」の略称を用いる)

## 2. 調査結果および考察

グラフ表示法に関し説明する。左線は外来語音掲載数、右線は日本語音掲載数を表す。つまり中央左の○は外来語音寄り、右は日本語音寄りの語表記を意味する。○—●とある表示の○は本見出しの総数を、●は本見出しと空見出し<sup>④</sup>の総数を意味する。重複箇所は◎で示す。○の上下位置は辞書登録数の多少を意味し、登録数の同じものは中央線から水平に表示される。これは語の普及度を知るひとつの指標となると考えられる。無論、辞書掲載数と慣用度・普及度が同義と考える訳にはいかない。たとえば固有名詞に関しては、『イミ』『現代』『基本』『新明』『学研』『岩波』『例解』は地名を、『イミ』『現代』『基本』『新明』『図解』『学研』『岩波』『旺文』『例解』『朝日』は人名を基本的に収録していないので、これらは下方に位置することとなる。

### ① シェ ジェ (図1)

シェはセとの間でゆれていると言われるが、セを本見出しとする辞書はほとんどない。セで固定したものもミルクセーキ程度である。これに対しジェ/ゼのゆれは多くの語にみられる。アルゼンチン、ゼネスト、ゼラニウムなどはゼで固定し、エンゼル、ゼネラル、ロサンゼルスなどはゼよりとなっている。



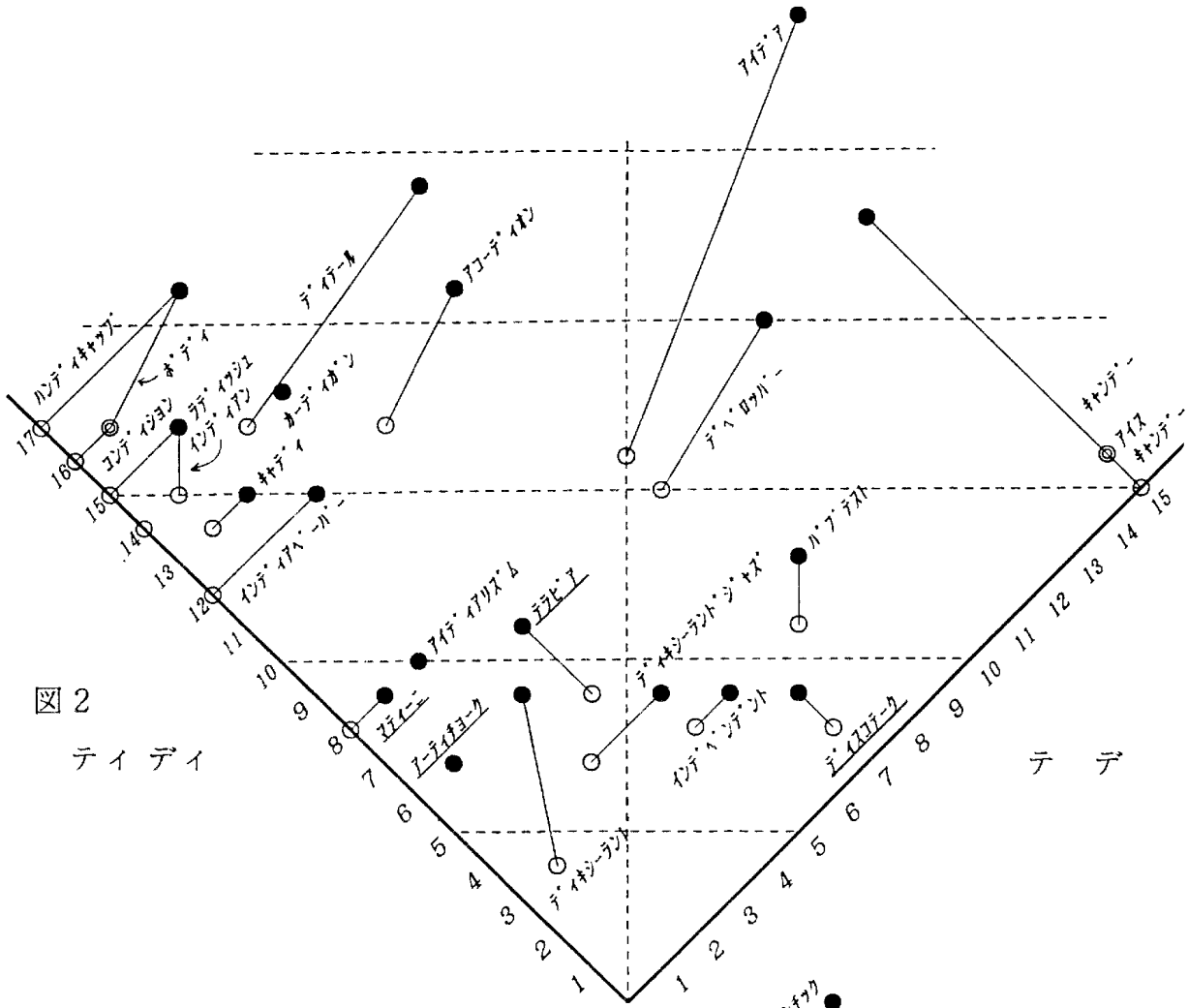


図 2

テイ デイ

テ デ

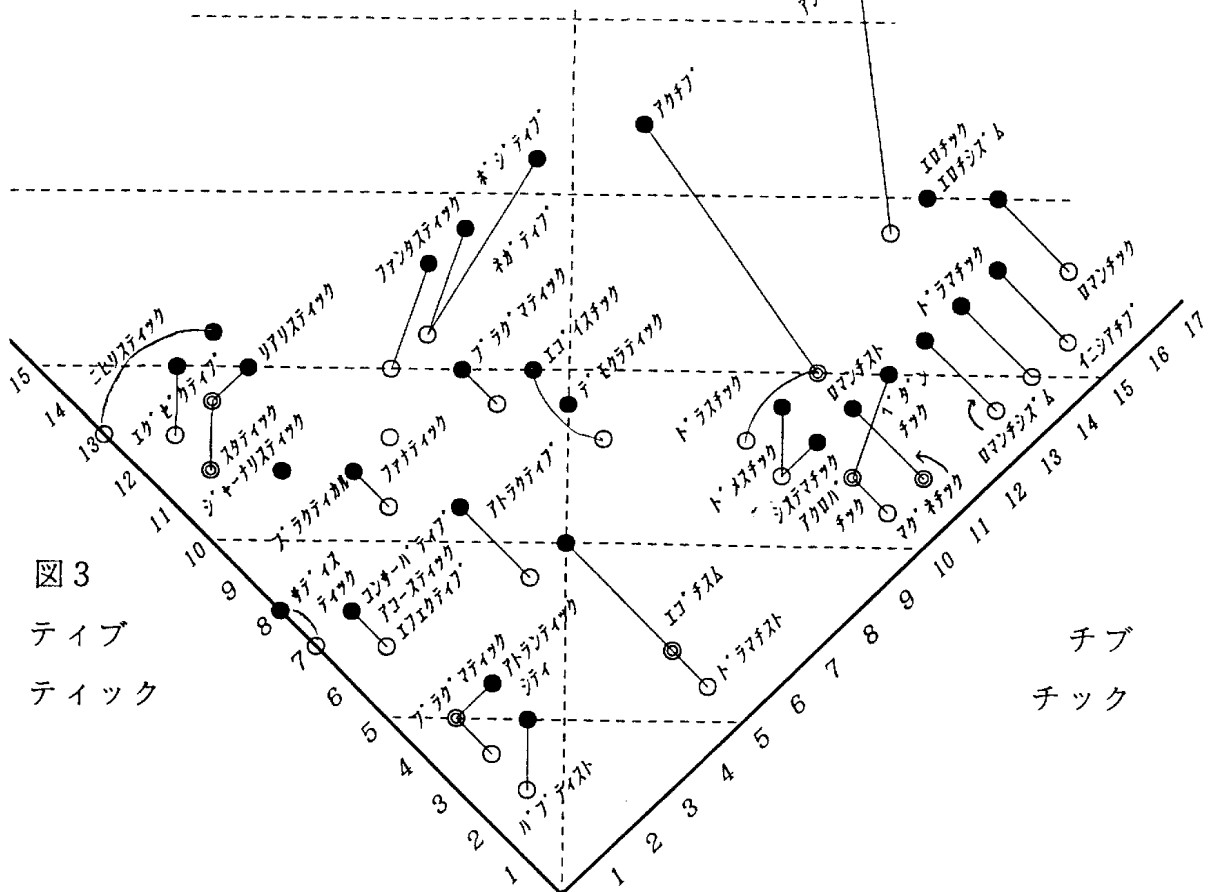


図 3

タイプ

テイック

チブ

チック

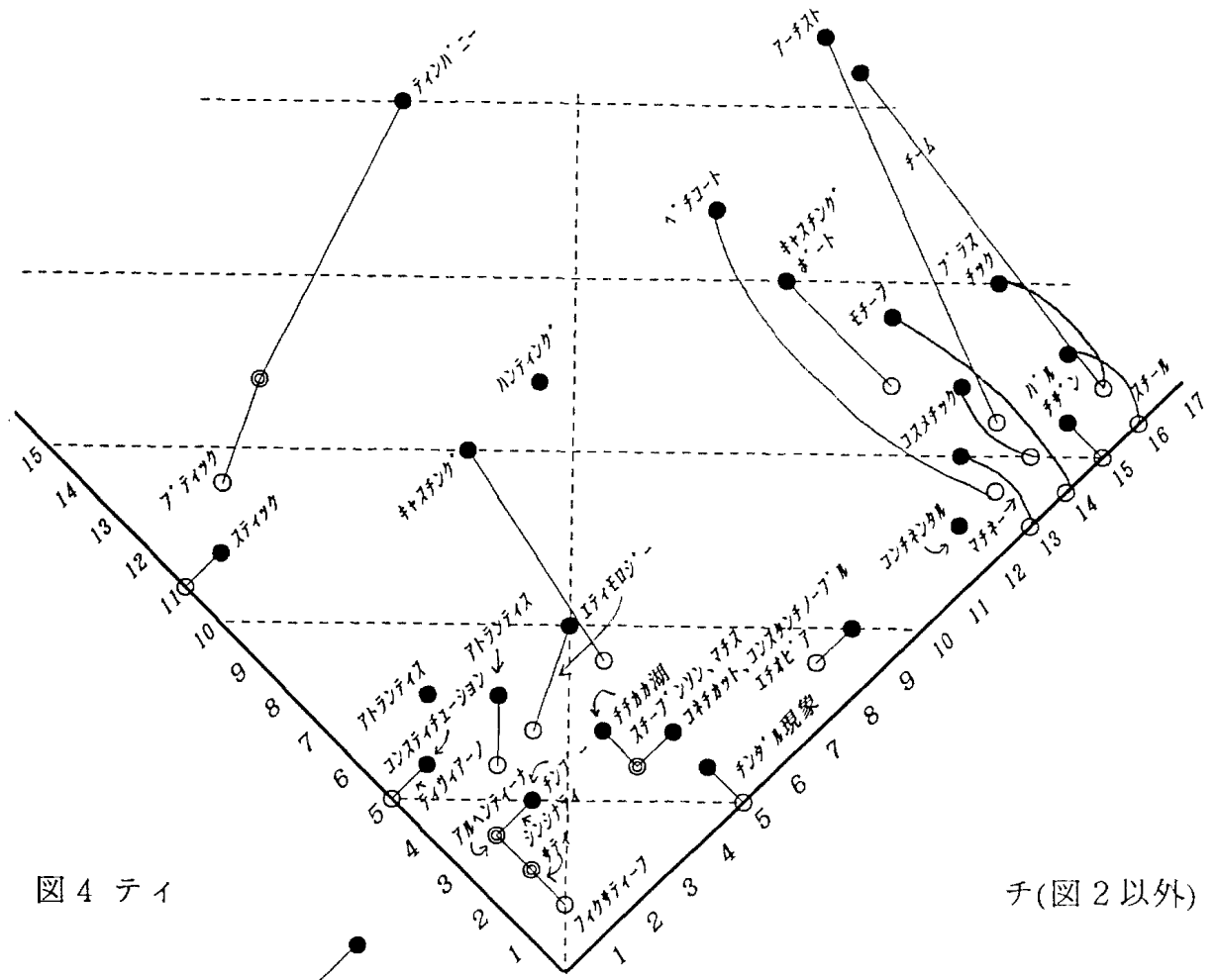


図 4 ティ

チ(図2以外)

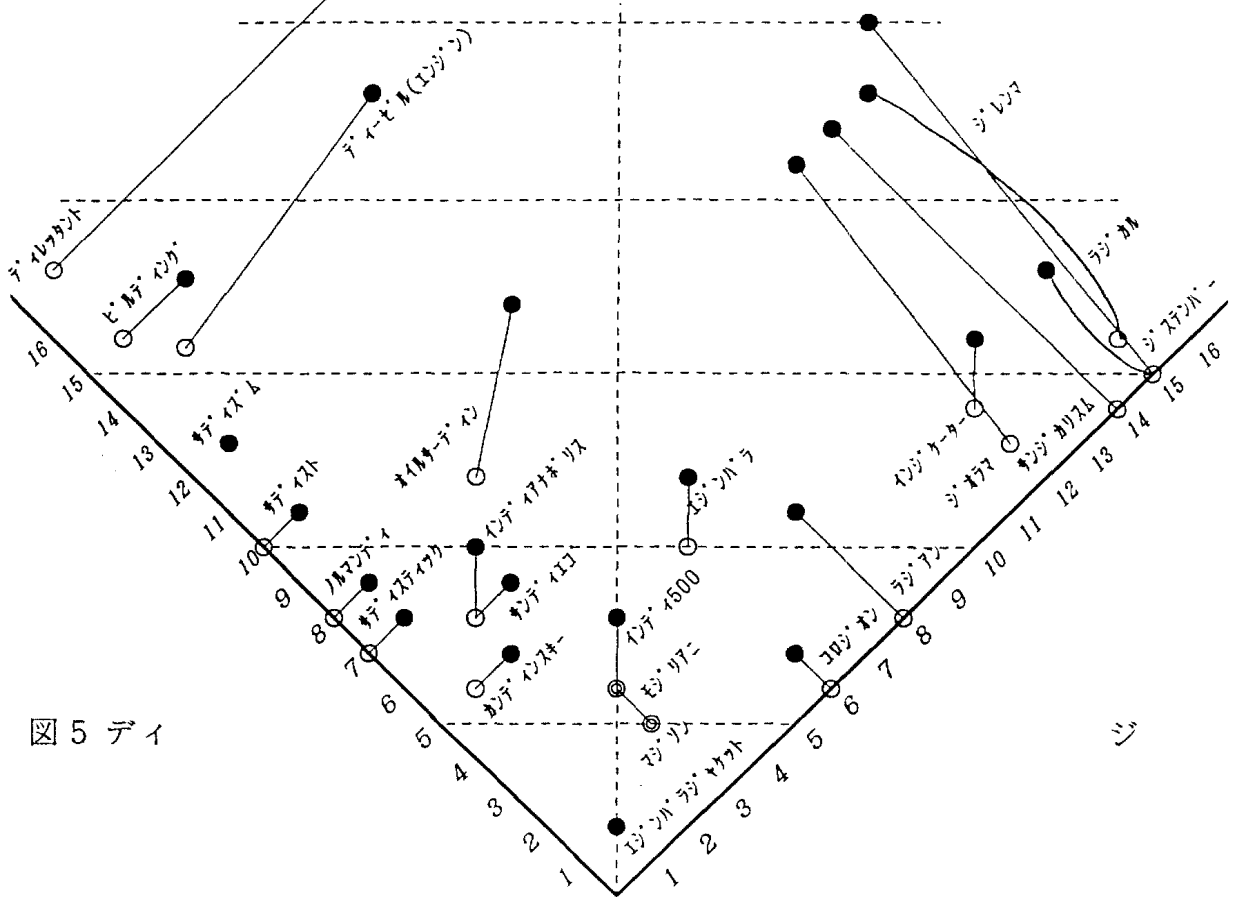


図 5 ディ

ジ

「地名」通りチになるものが多いのに対し、ディの方は規則で触れないデとなるものが多いことがわかる。チジ寄りの語は、アンチ アスレチック エチケット チップ(tip) マチエール エジソン クレジット スタジアム スタジオ ラジオ ジアスターゼなど両者共に多いが、テデよりの語では、デはデザイン デジタル デパート デモクラシー ハンデなど多数あるが、テの方はゆれの少ないものがほとんどない。

③ トウ ドウ (図6)

ティディがタ行ダ行直音イ段の「あきま」に入ると同様、トウドウもウ段「あきま」に入る音と考えられるが、ゆれのある語の大半は地名人名で、図の下方に位置しており、一般的とは言い難い。「地名」は、母音uの有無によるツズ・トド書き分け規則を立てており、NHK・新聞・辞典の多くでも、子音のみのt dはトド、母音を伴うものはツズで処理している。図6下線語はトドとゆれているものだが、ツズとゆれている方が比較的安定しているといえる。

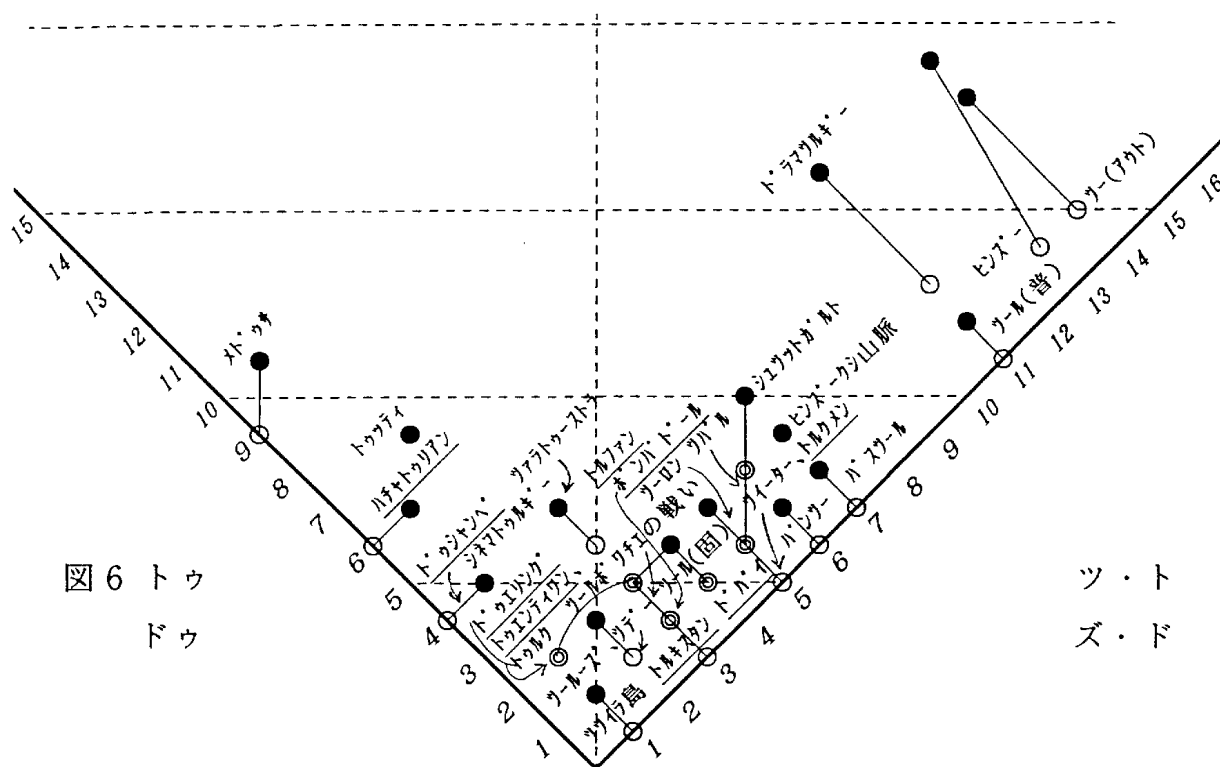


図6 トウ  
ドウ

ツ・ト  
ズ・ド

④ ファ フィ フェ フォ (図7)

「原則」には「ファフィフェフォはハヒヘホと書く」とあるが、現在ではゆれはフォとファに集中している。ただしフィフェがヒヘで固定した例には、明治に借用された、ヒレ(filet(仏)) ヘット(vet(蘭)) モルヒネ(morfine(蘭)) などがある。フィルム/ファイルのような拍数の変化するゆれ(下線語)は外来語音側に片寄っており、フィルム型は表記として定着しにくいことがわかる<sup>(8)</sup>。

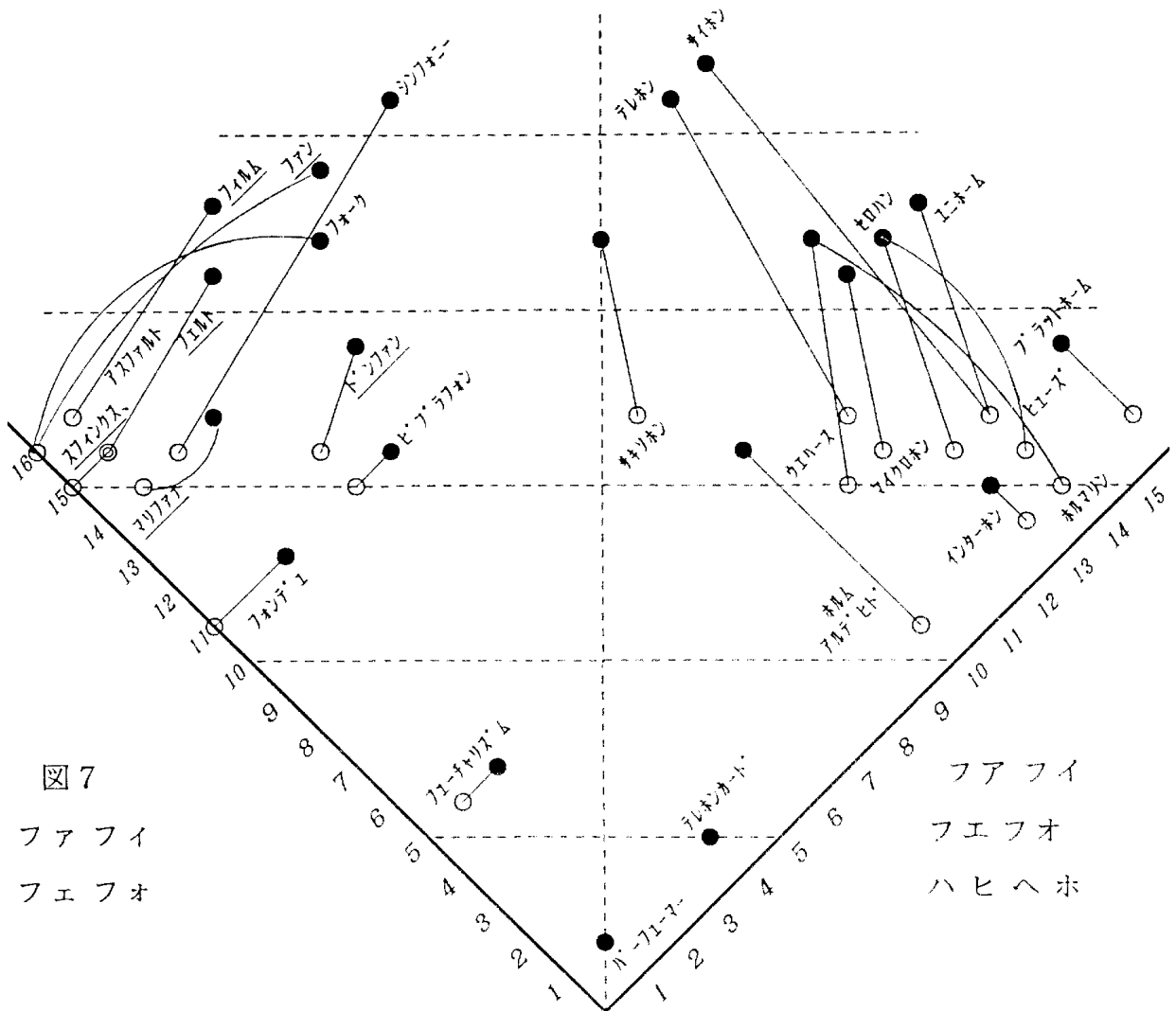


図7  
フア フイ  
フエ フオ

⑤ ウィ ウェ ウォ (図8・9・10)

図8・9からわかるのは、空見出し登録が少ない、つまり辞書ごとの安定度が高いことである。これは、「原則」には「ウイ ウエ ウオと書く」とあり、「地名」には「ウィ ウェ ウォと書く」とあるため、NHK・新聞・辞書(「学研」「言泉」「コン」など)が両者にしたがい、「人名地名はウィ ウェ ウォ、一般名詞はウイ ウエ ウオ」という書き分けをしているためだ。つまり同じ'way''wall'でも、地名のブロードウェー、ウォール街のウェウォのエオは小文字、一般名詞のハイウェー、ウォールフラワーのエオは大文字となる。しかしそもそも一般名詞と固有名詞の境界は曖昧なもので、たとえば地名のウィーンは、大抵は小文字となるが、ウィンナーソーセージ、ウィンナコーヒー、ウィンナワルツでは、ウィンナをウィーンの派生とみるのか、一般名詞に大文字をあてる「日本」「学研」「言泉」「例解」でも小文字の方を本見出しにしている(図9)。







今後の課題として残るのは、1991年6月の『外来語の表記』内閣告示以後、表記の規範としての辞典類がどのような影響を受けたかの追跡調査である。今回の資料に用いた辞典類はすべて1990年以前のものであるが、すでに『イミ』『現代』『広辞』『三省』『NHK』『朝日』等は告示後に改訂を行っている。

また、今回の結果を過去に遡って比べ、外来語音表記の変遷を把握することも課題の一つである。各辞典類にどのような改訂が行われたかを調査することで、ゆれの変化の方向性が考察できると思われる<sup>(10)</sup>。ちなみに『広辞』第二版・第三版を資料に外来語表記の変化を数量化したものに宮島、高木[18]があるが、前述のよう、辞典には各々の方針があり、一資料だけでは不明確な点があるため、なるべく多くの辞典を資料に数量化を試みる事が望まれる。

#### 注

\*1 「[あきま]とは、相関関係にある諸音素のうちの一部が欠けているか、相関関係にある諸モーラ或は諸音節のうちの一部が欠けている場合の空位をいう。(中略)現代日本語において /ti/ [ティ] /tu/ [トゥ] /di/ [ディ] /du/ [ドゥ] などというモーラのはいり得る空位がそれである。」(服部[19]p318)

\*2 NHK視聴者アンケートは、外来語音の慣用に関し巨視的に調査を行ったものとして貴重であり、放送用語としてふさわしい発音・表記を選ぶという観点から一般視聴者の外来語音の受容度を調査した石野[20]、竹田、石野[21]がある。発音の面接調査を行っているものに永田[22]、石野、安平[23]がある。

\*3 合拗音系列の「あきま」がワ行以外で利用されないことも、この可表記性との関連が大きいように思われる。たとえば「タ・ダ行」の合拗音エ段には [twe] などが想定されるが、「マーク・トウェイン」のように二拍分をもってしか表記されえないため、音韻としての /twe/ も定着が困難である。

\*4 外来語音を総括的に提示したものを管見の及ぶ範囲で整理した。金田一[5]の「怖うございます」の /wo/、秋永[6]の「おとつあん」「ごつおうさま」の /ca/ /ca/ も本表では外来語音として扱った。

\*5 たとえば『広辞』は、ウィ ウェ ウォの イェォを小文字表記に統一している。

\*6 説明中の異表記や、フューズ→ヒューズのような表示のこと。空見出しなしは●のみとなる。外来語音以外のゆれ(ジェスチャー/ジェスチュア)は数えない。ただし双方空見出し(シンフォニー→交響曲/シンホニー→交響曲)の場合などは両者を本見出しと数えるため、総数が17をこえることがある。

\*7 石野[24]によればD・Tの読みでも、Dのディー70.5%、デー6.2%に対し、Tはティー82.1%と圧倒的に多く、テーは3.2%とデーより少ない。さらに選択肢「場合による」も、Dは平均16.4%、Tは10.4%、特に原音志向の強い大学生はT7.3%に対しD17.1%であるが、これは、Tはティーだが、Dのデーは許されるという意見の表れと捉えられる。つまりデーに比べ、テーは使われにくいことがわかる。

- \* 8 石野[20]の発音アンケート結果では、フオークダンスは23%、フィンランドは25%の支持を得た。
- \* 9 「ぐあい/ぐわい」「たくあん/たくわん」等、わたりによる/w/挿入のゆれと同様の原理といえる。
- \* 10 マスコミ他の外来語表記法の制限という観点から総括的に変遷を表にしたものに菅野[25]がある。

#### 参考文献

- [1]小泉 保(1990)私の五十音図観【日本語学 9-2】p9 明治書院
- [2]松崎 寛(1993)外来語音と現代日本語音韻体系【日本語と日本文学 第18号】筑波国語国文学会
- [3]R.A.ミラー編(林栄一監訳)(1975)【ブロック日本語論考】研究社
- [4]亀井孝、金田一春彦(1955)国語音節一覧表(『国語学辞典』付録)東京堂
- [5]金田一春彦(1967)【日本語音韻の研究】p77 東京堂
- [6]秋永一枝(1969)日本語の音節(拍)は幾つか【講座日本語教育第5分冊】p15 早稲田大学語学教育研究所
- [7]馬淵和夫(1971)【国語音韻論】p20~21 笠間書院
- [8]西田直敏・西田良子(1976)【現代日本語】p59 桜楓社
- [9]城生恒太郎(1977)現代日本語の音韻【岩波講座日本語 5音韻】p113 岩波書店
- [10]古田東朔、山口明穂、鈴木英夫(1980)【新国語概説】くろしお出版
- [11]吉田則夫(1982)音声・音韻【国語概説(佐伯哲夫、山内洋一郎編)】p14 和泉書院
- [12]沢木幹栄(1983)日本語の音声と音韻【「ことば」シリーズ18言葉と音声】p50 文化庁
- [13]清水康行(1984)音声・音韻 宇野義方編【国語学】p45 学術図書出版社
- [14]上村幸雄(1989)五十音図の音声学【講座日本語と日本語教育 第二巻】p62 明治書院
- [15]カッケンブッシュ寛子、大曾美恵子(1990)【外来語の形成とその教育】p64 国立国語研究所
- [16]沼本克明(1992)日本語の歴史と文字・表記【教職科学講座25日本語教育学(奥田邦男編)】p73 福村出版
- [17]宮島達夫、高木翠(1984)雑誌九十種の外来語表記【国立国語研究所報告79 研究報告集】
- [18]宮島達夫、高木翠(1971)外来語の表記の変化とゆれ【計量国語学 71】計量国語学会
- [19]服部四郎(1960)【言語学の方法】岩波書店
- [20]石野博史(1974)外来語の表記と発音—識者アンケート結果報告(2)—【文研月報 24-7】
- [21]竹田スエ、石野博史(1974)外来語をどう考えるか【文研月報 24-8】NHK総合放送文化研究所
- [22]永田高志(1988)外来語音の定着とその意識【Sophia Linguistica 23/24】上智大学
- [23]石野博史、安平美奈子(1991)国際化時代の日本語・首都圏世論調査【NHK放送研究と調査40-8】
- [24]石野博史(1981)「順風満帆」をどう読みますか【文研月報 31-8】NHK総合放送文化研究所
- [25]菅野 謙(1976)外来音カナ表記の現状と将来【文研月報 26-3】NHK総合放送文化研究所